

ハサン・ティロの死 ——インドネシア人として死んだアチェ独立運動の創始者——

西芳実

2010年6月3日、アチェ独立運動の最高指導者だったハサン・ティロがアチェ州バンダアチェ市の病院で死去した。アチェのインドネシアからの分離独立を求める運動を率い、長くスウェーデンで亡命生活を送ってきたハサン・ティロは、死ぬ間際にインドネシア国籍を取得し、インドネシア人として死んだ。84歳だった。

1976年のスマトラ・アチェ国独立宣言に始まり、2005年のヘルシンキ和平合意でアチェ独立要求が取り下げられるまでの30年にわたるアチェ独立運動において、ハサン・ティロはそのほとんどの期間を海外で過ごし、だからこそ象徴的な役割を果たしてきた。

ハサン・ティロはオランダ植民地統治期の1925年に現在のアチェ州ピディ県で生まれた。曾祖父は、オランダによるアチェ王国の植民地に抵抗する闘争を率いたことで知られるイスラム教指導者のムハンマド・サマン(トゥンク・チ・ディティロ)である。インドネシア独立戦争期をアチェで過ごしたハサン・ティロは、インドネシア独立後、ジョグジャカルタの大学で学び、1950年代前半にはニューヨークにあるインドネシア政府国連代表部に勤務した。インドネシアをはじめとするアジア・アフリカの新興独立国がバンドン会議などを通じて国際社会にその存在をアピールしようとしていた時期である。

その後、ハサン・ティロは天然ガス開発が始まったアチェに戻り、自由アチェ運動(GAM)を結成してスマトラ・アチェ国の独立を宣言した。その根拠は、かつてこの地を統治していたアチェ王

国の主権とアチェ民族の自決権という二つの点から、インドネシア共和国によるアチェ統治を不当とするものだった。インドネシア政府主導で天然ガス田の開発が進められるなかで、「独立すればブルネイのようになれる」というGAMの言葉はアチェの一部の人々の関心をひきつけた。だが、独立運動はインドネシア政府による取締りを受け、運動の指導者は国外に脱出した。スウェーデンに拠点を移したハサン・ティロは、国連憲章や1960年国連総会決議などを引用しながらアチェ民族自決の主張を国際社会に向けて発信し続けた。

スハルト体制下における言論統制、インドネシア国軍によるGAM掃討作戦、2003年からのアチェ州に対する戒厳令の施行、2004年インド洋大津波といったさまざまな衝撃がアチェを襲い、アチェ民族自決という考え方はアチェの人々にとってリアリティを欠く状況が生まれていたが、それにもかかわらず、アチェ民族自決という主張は絶えることなく生き残り続けてきた。この背景には、ハサン・ティロが海外にいてアチェ民族自決の主張を維持していたことが大きい。そして、アチェ民族自決の考え方が根底にあったため、アチェをめぐる問題が解決しないのはアチェが独立していないためだとの考えを招き、アチェの人々に「アチェかインドネシアか」という二者択一の問いを迫る状況をつくってきたともいえる。

そのハサン・ティロがインドネシア人として死んだことは、長らくアチェの人々を悩ませてきたこの二者択一の問いに対し、問いを最初に発した人

物自らがインドネシアを選び、「アチェかインドネシアか」という問いそのものに決着をつけたことを意味している。その意味で、ハサン・ティロの死は、アチェ分離独立という形であらわれたアチェ問題の一つの区切りとなったといえるだろう。

だが、このことはアチェが抱える問題の解消を意味しているわけではない。アチェには未解決の問題が多く残されており、それらが解決されない限り、時代に応じた形となってあらわれてくるだろう。ハサン・ティロが長らくヨーロッパにいて、ヨーロッパの人々の関心を背負う形で民族自決という主張を抱え続けたように、外の世界がどのよ

うな関心を持つかによって、アチェ問題の解決を求める方向が選ばれることになる。イスラム国際ネットワークにもとづくテロリズムに（それが現実のものであるか否かにかかわらず）人々が関心を寄せている限りは、アチェでもそのような形で運動を見せようとする人びとが出てくる可能性がある。その意味で、外交や報道や研究や企業などのように現地社会の人びとと直接関わって日本社会の眼差しを伝える機会が多い人びとは、アチェの問題が「解決」に向かう方向性を作り出すことに関わっている。